

三 前澤萬重澤家に奉仕

前澤萬重は田島の人、通稱彌一衛門、字は溫恭、後清嶺と云ふ。知義の子である。姉は山吹藩の老臣片桐春一の室であつた關係から、その介を以て、平田門人たり。萬重は慶應三年九月上洛して、澤主水正の近習役に召加へられ、四方の志士と交り、國事に奔走するところがあつた。蓋し是より先、角田忠行の伊那郡に在るや、前澤家に寄寓することが多かつた。忠行此の頃澤家に在り、萬重の出京はその德憑によつたものであらう。

第五節 志士の潜伏

一 志士の來峽

文久元治の交、諸方の志士は京都に雲集し、激烈なる運動を試みるもの多く、所謂浪士の天下を現出し、幕府は絶えず隱密を放つて、それら志士の檢舉につとめた。此時に當り幕府の追捕を逃れ、又は反對派の爲に志を得ざるものゝ、奔りて伊那に來るものがなかくに多かつた。蓋し伊那峽谷は群山四方をめぐる天嶮の地である上に、此地に發達したる平田學の盛行と尊王思想の瀰漫とは彼等の逃げ込み場所として最も安全であり、且歡待もせられたからであつた。

村松文三、相樂總三サガラ、本名、小島將滿、角田忠行、里見次郎、長谷川鐵之進、堀謙吉、東田行藏、アツタ、原遊齋、都賀トガ厚之助、桂周平、磯山泰助の如きは其主なる人々であつた。

これらの志士は南伊那では女流勤王家、松尾ふゆ子の家を始とし、前澤萬重、北原稻雄、片桐春一飯田では櫻井文治郎、奥村邦秀其他同門の諸家に、北伊那では倉澤義髓の家に寓食した。峽谷の平田學徒はこれらの志士と時々密會しては彼等の勤王苦心談を聞き、または談論に花を咲かすといふやう

なこともあつた。伊那峡谷土着の志士が尊王倒幕の意氣は益々高調せられたのであつた。

就中松尾家に來投するものは引きも切らず、文久の末年から元治慶應の頃には、少きも二三人、多きときは七八人の志士——中には假裝の志士、やくざ者も交つてゐた——の滯留してゐるのが普通であつた。多勢子は悉くこれらの徒を容れて、自家の二階又は近所の空き家を借り入れて之に宿泊せしめ、米鹽以下の需要品を與へて彼等を養ひ、或は衣服旅費を給して彼等の發展せんとする所に向はしめた。伊那は恰も志士の梁山泊たる如きの觀があつた。

二 角田忠行

文久三年二月の末つかた、角田忠行は飄然と小野の倉澤家を訪づれた。角田は足

角田忠行像

岩村田 角田春千代氏藏



中編 平田學發達期 第六章 幕末勤王家の運動

利木首事件主謀者の一人であつたのであるが、辛うじて幕府の逮捕を免れ、着流し、雪踏ばきのまゝ、二晝夜を兼行し、先づ倉澤家に身を投じたのであつた。角田はこれから足かけ四年がほど、伊那谷に潜伏して居た。倉澤家を始め、田島の前澤家、伴野の松尾家、座光寺の北原家飯田の櫻井家、山吹の片桐家などを巡行寄食してゐた。それら諸家中、最も永く留つて居たのは倉澤家で角田の根據地たるの觀があつた。

ある時、倉澤家のそばを流れる川に大水の出

た時の如き角田は泳いで向ふ岸へわたり、水防したことなごあつた——角田の出生は佐久千曲川のほとりであるから水には馴れて居た。又ある時には、近所の子供が天神經を讀んで居るのを見て、そんなものを讀んではいけないとあつて、自ら祝詞を作つてそれを讀誦せしめたこともあつた。角田は日を消すために寫本をした。現に倉澤家に藏せられるものを舉げて見ると、

角田忠行筆蹟

岩村田 角田春千代氏藏

大君の命を死せしむるは
 古語をいふに死せしむるは
 まるく死せしむるは
 大君の命を死せしむるは
 死のつらからん中ふねをて
 やる

大君の邊に死ぬるさふ古語をゆめはするなよますら雄のさも
大君の我は御民そ武蔵野のむくらか中に朽ちはてめやは

平田門人姓名錄、伊吹舍歌集、鬼神新論、三
狐論、勝五郎再生奇聞、靈祭問答、風の音辨
卜鈔、櫛引文庫、白家學則衍義、

等十數種がある。就中平田門人姓名錄の如き、最も見事なものである。角田はまたよく松尾家へ行つた。當時松尾家では酒造をやつてゐた。彼は滯留中無聊に苦しむときは「酒御通」を造つて家人の御手傳をしたこともある。彼は狷介率直でちらかといへば短氣の方であつたから、松尾の長男誠なごよく喧嘩をした。飯田では櫻井文治郎とは意氣投合して仲がよかつた。樋口光信とは合はなかつたといふことである。

彼の水戸浪士事件の際北原眞幸等と赤穂に行つて、浪士等の動靜を探つたのも彼が潜伏中の出来事であつた。

忠行は信州人であり、且平田門人中の先輩であるところから、維新後熱田宮司となつた後も、本郡との交渉は頗る深かつたので、郡内には忠行筆の短冊を愛蔵する家が甚だ多い。角田忠行より山吹村堀尾陸郎氏に宛てたる手紙に。

小生貴地へ罷出候は、文久年中の事にて五十餘年昔なれば、大抵何も打忘れ候。供野も子刀自の縁にて田島村前澤彌一右衛門氏方に潜伏中、貴御家中片桐春一郎氏は前澤氏の姉婿にて平田家同門の爲に一度相尋ね候迄にて、其頃の事よく覚え無之候。右等の縁にて貴地には平田門下多く、四大人の社も建立候程に有之候。(明治四十三年一月廿三日付)

とあるのを見ても忠行とこの地との密なる關係があつたことは了解る。

三 長谷川鐵之進 長谷川鐵之進は越後の人、江戸朝川善庵の門に學ぶ。後京都に上りて勤王の士となり、文久癸亥の政變には七卿を護衛して長州に奔り、元治元年の變には長藩の家老と共に入洛したが、蛤御門の戦に敗れて四國に走り、翌年、長州奇兵隊より東北諸藩の向背を内偵せよとの命を受けて、伊那に入り來り、品川彌二郎の紹介狀を携行して先づ倉澤家を訪ひ、更に松尾、北原等の諸家を歴訪し、各々滯留數日に及んだ。彼は大酒家で一舉に三升を呑み、酔うて大聲叱呼し、長劔を揮つて放歌高吟する、其傍若無人の態度は女小供に尤も恐れられてゐた、彼は詩作文章には最も長じてゐた。倉澤家へは三回も訪れた。實に泣血淋漓の壯漢であつた。

都賀強之助は野州の人、年少氣鋭、王事に勤む。元治元年水戸浪士の伊那郡を通過するとき、浪士に隨行し、遂に敦賀に斬られた。

四 村松文三 村松文三は伊勢の人、安政年間出京して山中靜逸の門に入り、諸藩の志士と交り國事に奔走、後江戸に下り、薄井龍之と共に武田耕雲齋に會し、また上京して松本套堂、藤本鐵石と交り、共に事を舉げんとし、東海諸州に行き志士を糾合した。大和の事起る。到れば藤本等は敗死してゐた。彼は淨瑠璃語りとなり、再び水戸に出で、波山の義舉に加はる。文久三年水戸の衆四散の後江戸に出で幕吏の偵する所となり僅に身を以て免れ伊那に入る。後出京、慶應二年征長の役起り幕吏浪士を驅ること急、辛うじて讃岐に免るゝことを得たと云ふ。ふな子の「はりつめし矢たり心の國の爲いはなつ時はこうろしてまし」とあるのは文三へ嘘の歌である。

以上は本郡に逃れたる志士について二三の記述である。

現に北原家、松尾家及倉澤家にはこれら志士の筆蹟が藏せられてゐる。維新志士の面影を偲ばんとするものは就て見るべきである。

註 ① 倉澤道太郎翁談。

② 松尾爲誠翁談。

其他下伊那郡誌資料第六輯、拙稿「松尾ふな子」

第六節 水戸浪士軍來る